『接触場面における儀礼的相互行為　接触場面の言語管理研究 vol.14』(2017)pp.21-40

日本に住む外国人の文化的アイデンティティ
－Subjectivity と Identity による一考察－

Cultural Identities of foreigners in Japan: Observations from the viewpoint of objectivity and identity

ミラー 成三(千葉大学，人文社会科学研究科)
Seizo MILLER(Chiba University,
Faculty of humanities and social sciences)

Abstract

The main focus of this study is to give a new suggestion to identity studies, by clarifying multi-layers of identities and the relations between them. In this paper, focusing on the foreigners in Japan, the concept of 'identity' has been classified into identity and subjectivity. By analyzing the identity using the interview data and the subjectivity using the data collected through conversation recording, their relationship has been discussed. As a result, the importance of the integrated viewpoint of identity has been highlighted where identity can be analyzed using interview data, and subjectivity can be analyzed using conversational data as well as the principals of subjectivity formation.

1. はじめに

本研究は，アイデンティティの多層性，およびその関係性の一端を明らかにし，アイデンティティを研究する際の枠組みに新たな示唆を与えることを目的としている．本稿では日本に住む外国人の文化的アイデンティティに焦点を当て，アイデンティティを subjectivity と identity に区分し，会話録音のデータによって subjectivity を，インタビューのデータによって identity と subjectivity 構築の原則を分析し，その関係を考察した．そして，文化的なアイデンティティ研究においては，インタビューで得られるような identity だけではなく，実際の相互行為において構築される subjectivity と，subjectivity 構築の原則の全てを統合的に分析する視点の必要性を論じた．

2. 先行研究と本研究の目的

Eriskson(1950)によって「アイデンティティ」の概念が提出されて以降，アイデンティティ研究は様々な分野において発展してきた．グローバル化が進む近年の社会においては，異文化接触とアイデンティティの関連性を扱う研究の重要性が増してきており(丸井 2012)，異文化接触を経験した日本人のアイデンティティ(e.g. 南 2000; 塘 2010)のみならず，日本に住む外国人の異文化接触とアイデンティティの関連性を研究することも重要になってきている．

異文化接触によるアイデンティティ変化を捉える研究においては近年，特にアイデンティティを流動的で複合的なものとして扱う社会構築主義的な立場からの研究が盛んに行わ

れている．このような社会構築主義的な研究においては，インタビューのデータを使用した，ナラティブやライフストーリー研究法，会話分析的手法による研究が多く行われてきた(北出 2013)．一方で，インタビューなどのデータを用いた研究では自分のことを内省的に語る「語られるアイデンティティ」を分析することができても，実際の行動で示されるような「演じられるアイデンティティ」を捉えることは難しいと指摘されている．このようなアイデンティティを同時に捉えるためには，様々なデータを組み合わせた研究が必要となってくる(Norton & McKinney2011)．私見では，現在のところアイデンティティ研究として二つを同時に扱っている研究は少ない．本研究ではアイデンティティを identity と subjectivity に区分して扱う．Subjectivity とはディスコースにおいて，行為を通して自らをどう表現しているか（identity brought about)であり，identity とは時間をかけて subjectivity が繰り返されることによって形作られる，subjectivity よりも固定的なアイデンティティ(identity brought along)を指している(Baynham2015)．これによるとアイデンティティはこのどちらの性質も持っているため，両側面から分析することが望ましいが，これまでの研究ではそのどちらか一方にしか焦点が当てられてこなかった．

行為の中に現れる流動的な subjectivity が様々な場面で繰り返し構築されることによって，subjectivity より固定的な identity が形成される．このような考えに従うと identity と subjectivity は何らかの階層的な関係にあることになる．逆に考えれば，identity が形成されたならば，形成された identity を元にどのような subjectivity を構築するかを決定するということも考えられる．さらに言えば，この identity は他者によっても構築され得る．すなわち，相互行為を通して構築された他者の subjectivity を蓄積させて他者の identity を形成すると，今度はその identity をリソースとして他者の subjectivity を，相互行為を通して示していくわけである(ミラー2016)．

一方，相互行為を通して subjectivity を構築する際には，自己が他者にどのように見られたいかが関係してくる．例えば Goffman(1963＝石黒訳 1980)が指摘するように，スティグマだと判断されうると本人が感じているような identity があったとすれば，それを他者には隠そうとするのである(パッシング)．Identity と subjectivity，もしくは語られるアイデンティティと演じられるアイデンティティを同時に捉えようとするならばこの subjectivity 構築に関わる意識にも目を向ける必要があるだろう．

ここで注目される subjectivity 構築に関わる意識は，通時的な言語管理の蓄積の結果，形成される接触場面に向かう原則，あるいはストラテジーに類似している．ディスコースにおける言語使用や言語管理(Neustupný1985; 1994)には，「当該場面に限られた，ミクロな現象だけではなく,接触場面に参加する際の言語に対する態度や意識」が観察可能であることが指摘されている(村岡 2010; 49)．村岡(2010:53)では，このような習慣化された言語に対する行動を接触場面に向かう管理として考察を行っている．それによると，ネウストプニー(1989)の類型論的アプローチにおけるルール，ストラテジー，マキシムないし原則，決定要因という四つの階層のうち，マキシムとストラテジーは「顕在的ないし潜在的に知識として個人に所有され」ているものであり，接触場面に向かう管理にあたるものとして考えられるとしている．本稿で扱う subjectivity 構築に関わる当人の意識もまた，「顕在的ないし潜在的に知識として個人に所有され」るようになった，いわば subjectivity に対する態

度や意識ともいうことができるだろう[i]. 本稿ではひとまずこのような subjectivity 構築に関する意識を subjectivity 構築の原則として考えていきたい.

ミラー(2015)では，インタビュー・データで得られた語られるアイデンティティと，会話録音のデータによって得られた演じられるアイデンティティに着目して，これらの分析を行っている．それによると，インタビューで韓国人という意識(identity)を持っていると語っていた KF2 が, 実際の会話場面においても韓国人というアイデンティティ(subjectivity)を積極的に構築していることが分析されている.

会話例 1(p.10 の一部を引用)

1 JM2 えーと，初めまして h
2 KF2 初めまして hh
3 JM2 私は一○○(名前)です.
4 KF2 △△(名前)です
5 JM2 え，と
6 KF2 △△(名前)，韓国人なんです
7 JM2 え，そうなんですか?，すごい，日本語上手ですね h

この例では, KF1 と JM1 の初対面場面の冒頭部である. お互いが自己紹介をしているが, 5 行目で JM2 から聞き取れなかったことが示されると，6 行目で KF2 は再び名前を繰り返し，さらに相手からの質問などがないにも関わらず自身が韓国人であることを明かしている. このような韓国人という subjectivity の構築は KF2 によって積極的になされていたといえる．インタビューの分析では，KF2 に一度韓国人としての identity 危機が起きており，それ以来, 自身が韓国人であることを積極的に表示するようにしているという KF2 の習慣化した subjectivity 構築の原則が関わっていると分析されている．すなわち，KF2 は韓国人という identity を持ち，それを積極的に構築する，という subjectivity 構築の原則を持っており，実際の相互行為においても韓国人という subjectivity が構築されていた，ということになる.

一方で，パッシングのような subjectivity 構築の原則を持っている者も当然考えられ，その場合は identity とは異なる subjectivity が頻繁に構築されることが予測できる．そもそもパッシングをしている，ということは identity，subjectivity 構築の原則と subjectivity の存在を想定しなければ言うことができないことであり，このような者のアイデンティティを正確に捉えるためには，この三つの要素すべてに目を向ける必要がある.

以上のことを踏まえ，本稿では日本に住む外国人に焦点をあて，彼らの文化的アイデンティティ[ii]を identity と subjectivity に区分する．そして 2 種類のデータを使用し，彼らがどのような identity を持っているか，および，どのような subjectivity 構築の原則を持っているのかを分析する．さらに，それらが実際に示される subjectivity とどのように関わっているのかを考察することによって，本研究で扱うようなアイデンティティの多層性，およびその関係性の一端を明らかにする．これによって，アイデンティティを研究する際の枠組みに新たな示唆を与えたい.

3. 調査概要と分析の枠組み

以上のことを明らかにするために，本研究ではインタビューと会話録音の二つのデータを用いて分析を行った．インタビューのデータに対しては言語バイオグラフィー(Nekvapil 2003)の分析方法を援用して分析を行い，協力者の identity や，subjectivity の構築に関わる意識を抽出した．会話録音のデータに対しては会話分析(Sacks1972; 西阪 1997)的な手法を用いて，実際に構築された subjectivity を分析した．そして最後に，実際に示される subjectivity が identity や subjectivity 構築の原則とどのように関わっているのかを考察した．

調査は2014年夏から2015年の冬にかけて,日本に滞在している外国人を対象に行った．まず協力者に，日本で日常的に参加している場面のインターアクションを録音するように依頼をし，IC レコーダーを渡した．録音が終了した後，来日前後から現在までの経歴をインタビューした．これらのデータを文字化し，分析に使用した．

インタビューのデータは言語バイオグラフィーの分析方法を援用して分析を行った．言語バイオグラフィーは，当人の言語学習歴から言語習得や言語使用などを分析するものである．現在の言語使用のみならず，その言語使用に至るまでの言語習得の過程や言語使用の道筋をたどることができるという点にその特徴がある(村岡 2010;今 2012)．また，言語バイオグラフィーの手法では以下の三つのレベルのデータを収集できる．

1. 事実レベル：語り手の意図は含まれない実際の出来事や事実
2. 主観的レベル：経験した出来事についてどのように思っていたか
3. テキスト・レベル：インタビューでどの出来事を語るか，または強調するか

会話分析の手法は，Havey Sacks や Emanuel Schegloff, Gail Jefferson らによって発展し，様々な分野で活用されてきている手法である．関心は言語そのものよりも，むしろ言語を用いて遂行される行為にあり(串田 2006)，アイデンティティが構築される過程とその手続き上の秩序をステップ毎に追うことができるとされる(池田 2007)．このような手法は相互行為を通して subjectivity がどのように交渉，構築されているのかを捉える上で有効な方法であると考えられる．

本稿ではインタビューでの語りをこの三つのレベルに分類し，それぞれのレベルにおいてどのようなことが語られたのかを分析していく．そしてそこから，identity と subjectivity 構築の原則を明らかにしていく．最後に会話録音のデータを会話分析的な手法を用いて分析を行いながら，実際に示される subjectivity が identity や subjectivity 構築の原則とどのように関わっているのかを考察するとともに，identity と subjectivity を同時に扱うことの意義について論じる．なお，現在まで 10 名程度の協力を得ているが，本稿では下記の 2 名の事例に焦点をあてて紹介し，分析していく．なお，協力者の滞日歴や年齢はすべて調査時のものである．

表 1：調査協力者プロフィール

	出身国	滞日歴	年齢	性別	使用言語
ロング	アメリカ	27 年	28	男性	日本語,英語

スミス	アメリカ	31 年	31	男性	日本語,英語

4. インタビュー・データの分析

以下ではロングとスミスのインタビューで語られた内容を分析していくが，本稿で分析されている三つのレベルは従来の言語バイオグラフィーの手法とは大きく異なっている点がある．まず，事実レベルでは，家庭環境やそれぞれの時期における言語使用状況など，従来の方法で事実レベルに分類される語りに加え，主観レベルに分類される語りも含まれている．従来の手法では，個々の出来事について感じたことや現在どのような考えを持っているかなどは主観レベルの語りとして分析されるが，本稿ではそれぞれの時期に自分のことをどう思っていたのか，すなわち彼らの identity に関わる部分のみを記述し，それ以外は事実レベルに記述している．これは，各時期に起きた出来事およびそれに対する考えと，その当時の identity を見比べやすくするためである．またテキスト・レベルは，従来何が語られ，何が語られなかったかを中心に分析するものと言われているが，本稿では事実レベルや主観レベルの語りの中で強調して，あるいは詳しく語られていたエピソードを記述している．そのためテキスト・レベルではほかのレベルと同様の語りが記述されている場合がある．

表 2，表 3 はロングとスミスの語りをまとめたものである．以下ではそれぞれの表を概観しながら，それぞれの時期についてどのようなことが語られたのかをまとめていく．なお本章においては本人の語りを鍵括弧(「」)内に示す．

4.1 ロングのインタビュー・データ

4.1.1 ロングの identity

表 2：ロングの言語バイオグラフィー

	事実レベル	主観レベル	テキストレベル
小学校	・家ではだいたい英語，外ではまず日本語を使っていた ・1 年に 1,2 回アメリカに帰ったりしていた ・家では仮面ライダーなど，普通に日本のテレビを見たりしていた	・アメリカ人という意識	×
小学校後半～中学校，高校	・今まで 1 年に 1,2 回帰っていたアメリカに全然帰らなくなった ・親にも日本語を使うようになった ・簡単な漢字を読んだだけで	・日本人という意識	・英語の授業で，教科書を下手な英語で読んだ ・簡単な漢字を読ん

	驚かれた ・英語の授業で，教科書を下手な英語で読んだ		だだけで驚かれた
大学	・英語の授業が無くなった	・日本人という意識	・道を聞くと「日本語うまいですね」と言われたり，レストランに入ったときに英語の
	・道を聞くと「日本語うまいですね」と言われたり，レストランに入ったときに英語のメニューを出された ・英語能力が落ちていた ・仲がよかった人は国籍などを気にしていなかった		メニューを出された
就職・結婚	・就職や転職，結婚をするときにアメリカから書類を取り寄せた ・書類を記入するときに外国人ゆえの面倒さがあった ・在留カードを作らなくてはいけなかった ・英語の歌を歌っていたときにＲの発音ができなくなっていた	・日本人という意識のゆらぎ	・書類を記入するときに外国人ゆえの面倒さがあった ・英語の歌を歌っていたときにＲの発音ができなくなっていた
現在	・名前をいうと「ハーフ？」と聞かれる ・英語の使用を求められることがある ・英語を使うことはほとんどない ・英語はあまりできないので，事前に英語ができないことを言うようにしている ・自分と同じ思いをしてほしくないので，子供は英語ができるようになってほしい	・アメリカ人という意識 ・たまに忘れてしまう	・事前に英語ができないことを言うようにしている ・子供には自分と同じ思いをしてほしくない

ロングは 28 歳の男性で，日系アメリカ人の母とヨーロッパ系アメリカ人の父を持つ，日系アメリカ人である．ロングはアメリカで生まれたものの，生後 1 年ほどで両親とともに来日し，以降日本で生活している．小学校ころまでは，家庭内ではほぼ英語を使用していた．また，このころは 1 年に 1，2 回家族でアメリカに行っており，英語のみの環境に身を置くこともあったという．このように頻繁に英語を使用する機会があったロングは，このころはアメリカ人としての identity を持っていたという．一方で，このころについての意識や具体的なエピソードは語られず，後述するような identity と周りからの期待に乖離がなかった時期であると言える．

小学校後半からはアメリカに行くことがほとんどなくなり，家庭内でも日本語を使用することが増え，英語を使用する機会が減少していった．中学に入学する前後からは，一転して日本人としての identity を持つようになったという．一方で「簡単な漢字を読んだだけで驚かれた」と語っていることからも分かるように，ロングは，周りからは外国人やアメリカ人だと思われることも多かったと考えている.日本人という identity を持ちながら，周りからアメリカ人としての期待を感じていたロングは,その乖離に対処するために,様々な調整を行っていたという．例えば「最初の[英語の]授業で教科書を読む番がまわってきたんですよ．後ろの席に座ってたんですけど，教室のみんなが急に振り向いて自分の事じっとみてきたのにびびって，[注目されるのが嫌だったので]可能な限り下手な英語で読んだんですよね．」([]内は筆者による補い)と語るように，アメリカ人として英語の授業ではネイティブ英語を話すという期待をされていたときにはわざと下手な英語で読むという調整を行っていたことを語っている．このような状況は，高校に入学してからも同様であったという.

高校を卒業後，関東の大学に入学し一人暮らしを始めると，英語を使用する機会がほとんどなくなった．また中学のころからわざと下手に英語を使用していたロングは，自身の英語の能力が落ちていることに気づいたという.しかしこの時期にも日本人という identity を持っていたため，それほど気に留めることはなかった．また中学や高校とは異なり，大学では英語の授業を受ける必要もなかったため，アメリカ人として扱われることも少なくなったという．一方で，「道を聞いたりするとだいたい『日本語上手いですね』って言われるのは，すごく嫌だった」と語っているように，この時期にも自身の identity と周りからの期待の乖離を感じることがあったようである.

大学を卒業後，新潟にある企業に入社し，その数年後，転職を機に関東に戻って日本人の妻と結婚をする．この際，様々な書類をアメリカから取り寄せる必要があった．ロングはこのころも日本人としての identity を持っていたが，書類を取り寄せる必要性や，「書類を書くときも，例えば名前を日本語で書くのか英語で書けばいいのか分からないとか．そういう外国人ゆえの面倒さ」に頻繁に遭遇したことを語っており，本人の identity と社会制度との間の乖離を経験した時期でもあった.

ロングは，本人が「ドラマチックな出来事があったわけではなく，小さなことの積み重ね」と語るように，これらの時期を通じて様々な接触経験や社会制度による気づきを蓄積させていった．そしてある時「R の音が発音出来なくなっているのに気づいたとき」にショックを感じたというロングは，このことが境となって自分が実はアメリカ人であったと考えるようになり，現在は自分のことを「アメリカ人だと認識」している．つまり，R の

音が発音できなくなっていることにショックを感じること自体，アメリカ人という identity がなければ起こりえないことだと解釈したものと考えられる．一方で，「たまに忘れる」と語っているように常にアメリカ人ではなく，日本人，もしくはそれ以外の意識も持っているようである．アメリカ人と日本人のという文化的アイデンティティの間を行き来するロングの identity は現在も安定しているとは言えず，今後も変化していくことが予想される．

4.1.2 ロングの subjectivity 構築の原則

ここまで見てきたように，現在はアメリカ人という identity を持っているロングだが，ここに至るまでに大きく変遷していることが明らかとなった．また一方で，自身の identity と周りからどう見られるかが乖離しているときに行っていた(例えばわざと下手な英語を使用するというような)様々な調整が語られている．これは，他者から見られたくない identity を別のもので隠すという点において，Goffman(op. cit.)が述べるカヴァリング[iii]などと類似した調整であるかもしれない．このような乖離に対する調整は，そのような乖離が頻繁に見られた大学の時期までは習慣化しており当時の subjectivity 構築の原則として持っていた可能性がある．一方このようなロングの subjectivity 構築の原則は，アメリカ人という identity が強まってきている現在とは異なっていると考えられる．

では，ロングの現在の subjectivity 構築の原則はどのようになっているだろうか．端的に言うならば「自分がアメリカ人であることは聞かれたら言うけど，自分からは言わない」ことである．このように，自らのアメリカ人という subjectivity を構築することに消極的である一方で，ロングはアメリカ系の苗字を持っているため，「名前を言ったらほぼ聞かれるので，結局言うことになることが多い」とも語っている．現在は，アメリカ人という subjectivity が構築されると，自ら「ずっと日本に住んでるからほとんど英語話せない」と打ち明けるようにしているという．

ロングが自身のことを日本人だと思っていた時期は，英語をわざと下手に読むなどしてアメリカ人という subjectivity を否定するような意識を持っていた．他方，アメリカ人性が強まってきた現在においては,アメリカ人という subjectivity は肯定するようになってきた．しかし，英語を使用しない生活を送っているうちにロングの英語能力が減退してしまったために，アメリカ人に期待されるような英語能力がないこと，すなわちアメリカ人というカテゴリーに結びついた期待を否定する，という意識に変化してきているわけである．またアメリカ人に結びついた期待，すなわち英語能力を持っていないとロング自身が考えていることは，ロングが自分のアメリカ人という subjectivity を積極的に構築しないという意識にも関係しているだろう．

4.2 スミスのインタビュー・データ

4.2.1 スミスの identity

表 3：スミスの言語バイオグラフィー

	事実レベル	主観レベル	テキストレベル
幼少，小学校	・家庭内では英語，家庭外では日本語を話していた ・周りからもアメリカ人と思われていた ・長期休暇の際にはアメリカに帰っていた	・恐らくアメリカ人	×
中学校	・英語のテストなども楽だった	・アメリカ人	・父親とけんかをするときに英語を使用し
	・英語ができたので，周りの人からすごいと言われた ・父親とけんかをするときは英語だった		ていた ・英語ができてすごいと言われて鬱陶しく思った
高校	・楽だったので英語科に入学することにした ・入学試験の英語も簡単だった ・英語ができてもすごいことではない	・アメリカ人	・英語ができてもすごいことではない
大学	・推薦で外語系の大学に合格した ・初対面の人に外国人として見られる機会が増えた ・すごいと言われるのに慣れてきて優越感を感じるようになった	・アメリカ人 ・アメリカ人の揺らぎ	・すごいと言われるのに慣れてきて優越感を感じるようになった
就職	・外国人として見られるのにイライラした ・アメリカ人であることをあまり言わなくなった ・自分が何人なのかについての悩みがあった ・職場の先輩に言われた個人としてのスミス	・文化的 identity の悩み ・個人としてのスミス	・外国人として見られるのにイライラした ・職場の先輩に言われた個人としてのスミス
現在	・他者からはアメリカ人，ま	個人としてのスミス	・聞かれたら日系ア

	たは外国人として見られる ・自分がアメリカ人であることは事実である ・聞かれたら日系アメリカ人ですと言うようにしている ・職場やプライベートでは英語ができることで頼られている ・英語ができること＝アメリカ人ではない		メリカ人ですと言うようにしている ・英語ができること＝アメリカ人ではない

続いてスミスのインタビューを見ていきたい．スミスは 31 歳の男性で，元日本人(日系アメリカ人 1 世)の母とヨーロッパ系アメリカ人の父を持つ，日系アメリカ人である．スミスは日本で生まれ，それ以降日本で生活している．幼少の頃から家庭内では英語，家庭外では日本語を使用する生活を送っていた．小学校のころまでは長期休暇時に頻繁にアメリカに帰ることもあったという．スミスはこのころのことをよく覚えていないと語っているが，英語を使用する頻度が非常に高く，周りからもアメリカ人と思われていたと考えていた．このころについての意識や具体的なエピソードはあまり語られず，ロングと同様に比較的安定した identity を持っていたと考えられるため，アメリカ人という identity を持っていたと推察することができる．

中学校に入学すると，英語の授業が始まり，家庭外でも英語を使用することが増えたという．「テストとかはめっちゃ楽だったので，そこはよかったかな」と語っているように，英語能力の高さによってよかった点がある一方で，「教科書とか読んだりするじゃないですか．そのときとかにあまりにも周りから『すごい』とか言われるからそれが嫌で嫌で．こういうのもあれなんですけど鬱陶しかったですね．」と，周りから英語能力の高さを評価されることを鬱陶しく思っていたという．すなわち，アメリカ人である自分の英語能力が高いのは当然のことであり，よい評価であっても，それを常に評価されること自体を否定的に捉えていたわけである．また中学校の頃は両親に対して反抗的であったスミスは特に父親としばしば口論をすることがあったという．スミスはその時のことを「本当に多かったんですよ．取っ組み合いの喧嘩になったこともありました」と語っている．さらに「大体英語でしてましたね(中略)そう考えるとやっぱりアメリカ人だったのかなって感じ」と語っており，喧嘩をする際の言語が英語であったことから，当時アメリカ人としての identity を持っていたことを語っている．スミスは高校の頃もほとんど同じ状況であったと考えているようである．楽であるために英語科に入学をしたり，入試なども簡単だったというように，高い英語能力によってよい良い点があったことを認めながら，周りから受ける『すごい』という言葉に対しては「やっぱり鬱陶しかったですよね，自分が英語できても何もすごいことないんですけどね」と感じていたという．中学のころも同様であったが，この，英語ができるのは当たり前というスミスの語りからは，アメリカ人としての identity を持つスミスの姿を見ることができるだろう．

ところが，大学に入学してからこのスミスの態度は徐々に変化していった．初対面の人と交流をする機会が増え，「アメリカ人っていうか外国人かな．例えば，まあ圧倒的に多いのは『日本語上手いですね』と『○○食べれますか？』とか」と，他者から外国人として見られるようになったことを語っている．その際にも変わらず英語ができたために周りからはすごいと言われていたスミスだが，それにも徐々に慣れていったという．「大学のころ，いつからかははっきり覚えてないんですけど．もうあまりに言われるから慣れてきちゃって．そのうちなぜか優越感が残ったんですよ」と語るように，大学に入ると英語ができることに関して，次第に優越感を感じるようになっていった．この語りからは高校のころまでは，英語ができるのはアメリカ人なので当然，という意識を持っていたスミスの変化が見てとれる．

就職後の語りからは，さらに明らかな変化を見ることができる．この時期でも，初対面の人と会うと外国人として見られることを語っていたスミスだが，このころは自分がアメリカ人であることも積極的には言わなくなったという．その一つの理由として，「外国人みたいな扱いをされるとちょっとイラっとしてたんですよね．(中略)なんか自分を見てない感じ」と，他者が，自分がスミスという人間ではなく外国人であることを強調して捉えており,それに対して強い不満を持っていたことを挙げている.このような中でスミスは，「日本人でもアメリカ人でも無いんで，本気で悩んでた」と次第に自分の identity について悩むようになっていった．しばらくこのような悩みを持っていたというスミスは，ある日職場の先輩に言われたことがきっかけとなって identity に大きな変化が起きる．この時について，「それで悩んでたんですけど，職場の先輩と飲みに行ったときに，『んなもんどーでもええやろ，お前はお前や』って言われて，なんかはっとしましたね．それからは日本人とかアメリカ人とか一切気にしなくなった」と語っており，アメリカ人や日本人に拘らない，スミス個人としての identity を持つようになっていったことがわかる．

スミスのインタビューは，この大学から就職期の話が主となっており，アメリカ人という identity の揺らぎ，identity の悩み，そして解決という道をたどっていることからも，このことがスミスにとっての，ここまでの人生の決定的な経験(桜井 2002)となっていたことが言えるだろう．この決定的な経験以降，現在もスミス個人としての identity を持ち続けているようである．

このようなスミス個人という identity は，社会的アイデンティティであるアメリカ人や日本人という文化的アイデンティティからの脱却という点においては，「『国際人』とでも言えるような，『新統合型』のアイデンティティ」(中島 2001, pp.190)と同様のものとも言えるだろう．

4.2.2 スミスの subjectivity 構築の原則

ここまで見てきたようにスミスはロングとは異なり，アメリカ人という identity を持ち続けていたが，先輩からの言葉をきっかけにして，スミス個人としての identity を持つようになった.その過程でスミスの subjectivity 構築の原則が変化していったことは想像に難くない．一方で，現在になっても，他者からアメリカ人や外国人として見られることは変わっていないという．では，スミスの現在の subjectivity 構築の原則はどのようになっているのだろうか.

これはロングと同様，「聞かれたら言う」が「自分からは言わない」ことである．このようなスミスの subjectivity 構築の原則は，明らかにスミス個人というスミスの identity と関わっている．スミスはインタビューの中で「自分がアメリカ人であることは事実」であると語っており，その点に関しては否定することができないと考えている．ただし上述した通りスミスは，スミス個人という identity を持っているために，アメリカ人であることを自分から表示することはしない，という意識を持つことになった．一方で，スミスは現在は職場の人に簡単な英会話を教えたり，趣味であるというゲーム内のチャットなどで日本語と英語を翻訳，通訳するなどしており，様々な場面で周りの人から頼られているという．この点についてスミスは，「アメリカ人は英語ができるかもしれないけど，英語ができるからといってアメリカ人，ということではないじゃないですか(中略)英語ができるという部分を頼られるのは全く気にならない」と語っており，自身の英語能力と文化的アイデンティティを分離して考えていると報告している．

5. 会話録音データの分析

ここまで，インタビューからロングとスミスの identity と subjectivity 構築の原則を分析してきた結果，それぞれ対照的な変遷をたどってきていることが分かった．このような変化には，接触場面における接触経験(例えば相手から「日本語うまいですね」と言われたことなど)や社会制度による気づきの蓄積が関わっていた．また，これらの identity は，ロングの subjectivity 構築の原則とその変化にも大きく関連していることが分かった．

では，実際の相互行為で彼らはどのような subjectivity を構築していたのだろうか．結論から言うと，ロングの会話録音には「アメリカ人」という subjectivity の構築は見られず，スミスの会話録音には「アメリカ人」に相当するような subjectivity や英語能力上級者としての subjectivity の構築が見られた．以下では二人の会話録音のデータを見ながらどのような subjectivity が構築されていたのかを分析していく．なお，地名など固有名詞はすべて匿名化されている．

5.1 ロングの会話録音データ

これは，ロングが友人とビアフェスティバルに行ったときに録音された会話である．抜粋部は 2 名しか発話していないが，会話には本人に加え，友人であるシンヤとノボルとその場で出会った，初対面であるエミとダイゴの計 5 名が参加している．

会話例 2

1	ロング		あ,どうぞどうぞ
2	ダイゴ		いやいやいやいや::
3	ロング	→	新潟は:,モツはちょっとした自慢なんすよ
4	ダイゴ		ん↑
5	ロング	→	モツ焼きがちょっとした自慢なん(　)
6	ダイゴ		ほんと↑,新潟の↑
7	ロング	→	新潟のモツ焼きはちょっとした自慢ですよ,うまいですよ
8	ダイゴ		そうなん(だね)

この例の直前で，ロングはビールとモツ焼きを友人たちにすすめており，ビールを全員で味見していた．1 行目ではロングが「どうぞどうぞ」と改めてモツ焼きをすすめている．2 行目でダイゴが「いやいやいやいや」と言いながら，すすめに応じてモツ焼きを食べようとする．するとロングはさらに 3 行目でモツが新潟の自慢であることを述べる．4 行目でダイゴが無限定的な質問によって修復を開始すると(Shegloff et al.1977)，5 行目で 3 行目を部分的に繰り返すことによって修復を行う．さらにダイゴが「新潟の」と自身の理解の確認を求めると，7 行目では「新潟の」と繰り返しに付け加える形で確認を与えている．さらに「うまいですよ」と述べることで再度もつ焼きをすすめている．8 行目では「そうなん（だね）」と述べることでもつ焼きが新潟の自慢であるというロングの主張に理解を示している．

この事例においてロングは 3 行目，7 行目においてモツ焼きを新潟の自慢であると述べている．自慢という行為を行うためには，自分がそのグループに所属していてかつ，他者がそのグループに所属していない(と本人が考えている)必要がある．すなわち，ここではロングは自ら「新潟人」のような文化グループの一員としての subjectivity を表示すると同時に，ダイゴに対しては「新潟人」ではない，すなわち「非新潟人」としての subjectivity を表示することによって，モツ焼きを自慢しているわけである．そして最終的にダイゴもそれを受け入れることによって，二人の対照的 subjectivity が構築され，もつ焼きを相手にすすめることを成し遂げているのである．

5.2 スミスの会話録音データ

会話例 3 はスミスが友人(職場の先輩)2 名と食事をしている際に録音されたものである．この例の直前では日本のハンバーガーチェーンについて話をしていた．

会話例 3

1	フルタ		でもなんかいま,とどめをさすために:,なんか海外から:,来てるらしいんすよね,
2			なんか,あの,ちょっと,よさげなハンバーガー屋が[(1.0)有名な
3	ツルノ		[へ::
4	スミス	→	バービーズとかこないかな
5			(2.5)
6	スミス	→	超バービーズ食いて:すもん
7	フルタ		[それ
8	ツルノ		[いいんじゃん,いいんじゃん,いいんじゃんもうじゃあ,
9			あのドネルケバブとかのお店でさ
10	スミス		h ケバブで全然いいすけど
11			(0.5)
12	フルタ		( ):さん
13	スミス		h
14	フルタ	=>	それあれ,あそこにあんの,ハワイにあんの

15　スミス　　ハワイは:昔ありました,今は,あんのかな:ハワイ島には無くなってました

1 行目でフルタは，海外のハンバーガー屋が日本に進出してきているという話題を開始すると，4 行目ではスミスは海外のハンバーガー屋の例として「バービーズ」というハンバーガー屋を提示している．さらに 6 行目で「超バービーズ食いたい」と，その進出を希望する理由を述べる形で再度そのハンバーガー屋について述べている．8，9 行目では，ツルノによってハンバーガーに代わる店としてドネルケバブのお店が提示されており，10 行目でスミスもそれに同意をしている．少しの間のあとに，12 行目ではフルタが呼びかけを行い[iv]，さらに 14 行目で「それあれ，ハワイにあんの」と 4，6 行目で発話された「バービーズ」に対するフルタの理解候補の提示がされている．それに対して 15 行目では「ありました」と過去にはあったというスミスが知っている知識でフルタの理解を承認している．

14 行目でフルタは「それ」という「バービーズ」を指示する語を用いて理解候補の提示を行っている．この「それ」は「バービーズ」が発せられた 6 行目の直後でも発せられているが，ツルノの発話と重なりが生じたために中断されており，7 行目で中断された発話を 14 行目で再度発話しているとも考えられる．そうだとするならば，14 行目は 6 行目をトラブル減とする修復の開始(Shegloff et al. ibid)であり，その間に挿入的に 8～10 行目が発せられているということができるかもしれない．

いずれにせよ 14 行目でフルタは，「どこの？」というような開かれた形式ではなく「ハワイにあんの？」という具体的な場所を閉ざされた形式で質問していると言えるだろう．それまでは海外という漠然とした情報しか発せられていなかったにも関わらず，この閉ざされた形式の質問をすることができるということは，少なくともフルタがこの瞬間，スミスをハワイにルーツがある者として見ている証拠と言うことができる．言い換えるならばフルタは，「バービーズ」という未知の海外のハンバーガー屋をスミスがルーツのあるハワイという具体的な場所と結びつけることによって理解しようとしたわけである．実際，その subjectivity は 15 行目でそれはスミスが質問に適切に答えることによってスミス本人にも受け入れられている．このようなフルタから表示されたスミスの subjectivity は上述の「新潟人」と同様「ハワイ人」というような subjectivity として捉えられていた可能性もあるだろう．

このようにスミスの会話録音のデータには「アメリカ人」と近い文化的アイデンティティが見られたが，他にも，スミスの英語能力上級者としての subjectivity が構築されるような場面も見られた．次の会話例 4 は会話例 3 の少しあとの会話である．

会話例 4

1	フルタ		英語表記でやってんの
2	スミス		はい,ずっと英語っす
3			(0.8)
4	フルタ	→	俺とツルノさんハワイ行くからさ,スミスくんついてきてよ,旅行,旅行行く
5	スミス		え,(　)さんも行くの
6	フルタ	→	ついてきてよ,通訳で，必要なんだ[よ
7	スミス	=>	[金が無いんだけど

8　フルタ　　スミスくんの力が必要なんだよ
9　スミス　=⇒　金が無いんだけど，［りょ－
10　フルタ　　［だいじょぶだよ:
11　スミス　　旅費出してくれるならツルノさんにお願いするけど

会話のデータはICレコーダーのみで録音されているため，1行目と2行目のやり取りが何を指しているのかは定かではない．しかし，この例の少し前にfacebookについてやりとりを行っており，スミスのfacebook上の名前の表記について話している可能性が高い．2行目で英語表記であることがスミスによって認められると，4行目ではフルタがハワイへの旅行にスミスもついてくるように依頼をしている．6行目でもう一度「ついてきてよ」と依頼をした後に，さらに「通訳で」と発話し通訳として旅行に同行してほしいと，依頼の内容が詳細になり，さらに「必要なんだよ」と発話することによって，依頼の深刻度を高めている．それに対して，スミスは7行目では，6行目の終了部に重なる形で「金がない」と金銭的な問題を述べることによって，依頼を断ろうとしている．8行目ではフルタが「スミスくんの力が必要なんだよ」と発話しており，6行目の自身の発話を強める形で再度依頼をしている．これに対してもスミスは再び「金がない」と金銭的な問題を述べ，10行目と重なって一度中断してはいるものの，さらに「旅費を出してくれるなら」と金銭的な問題が解消されれば依頼を受けることを述べている．

この例では，フルタがスミスに対して，通訳としてハワイに同行するように依頼をしている．通訳というのは，元来2言語以上に関して高い言語能力を持っている者でないと適切にその役割を担うことができないものである．すなわち，この場面でフルタは，スミスのことを日本語と英語の両言語が，高いレベルにある者として見ていることになる．一方で，通常通訳に求められるのは高い言語能力であり，国籍などは考慮されない．このことからも，スミスをアメリカ人ではなく，高い言語能力を持つ者として見ていることが言えるだろう．またスミス自身，依頼を断る理由として，金銭的な問題を挙げているのみで，むしろ11行目では金銭的な問題が解決されれば行ってもよいという態度を見せている.すなわちスミスも自らを通訳としてハワイに行くことができるほどの言語能力を持つものであることを認めているわけである．

他方,ここで行われている依頼には二つの可能性が考えられる.一つは言うまでもなく，本当に依頼をしている可能性である．そしてもう一つは，冗談として依頼を行っている可能性である．この会話例の後には，少しの間，金銭面についてフルタがスミスを説得するやりとりが続くが，解決しないままフルタはトイレにたってしまう．しかしフルタが戻ってきてからはその話題について一切触ることがなかった．また，音声的にもフルタはまじめに依頼をする口調ではなく，どこか冗談めいた口調で依頼や説得をしている．あくまで可能性のひとつではあるが，このやりとりはフルタによってある種の冗談として発話されており，その冗談の核となる部分には，スミスの高い言語能力がリソースとして用いられているのである．フルタとスミスの関係性を考えれば，一般的にはそのような冗談を言い合うことができるような関係性は「友人－友人」という関係であるだろう．もし，そうだとするならば，言語能力や文化的アイデンティティでさえも「友人－友人」という関係性

を行為するᵛためのリソースとなり得るのである．これ自体非常に興味深いものであるが，ここで深く分析することはできないため他稿に譲りたい．

6. 考察

ここまで 2 名の会話録音のデータを分析してきたが，ロングの会話録音には「アメリカ人」というような subjectivity の構築は見られず，スミスの会話録音には「アメリカ人」に相当するような「ハワイ出身者」という subjectivity や英語能力上級者としての subjectivity が分析された．

一方，会話例 2 で分析された「新潟人」のような subjectivity はロングのインタビューでは語られることはなかった．しかし，実際の相互行為を通して構築されており，しかもほかの参加者よっても認められている．このような subjectivity が構築されていることを考えると，インタビューで得られるような identity のみに焦点をあてて相互行為を通して構築される subjectivity を無視する，ということはできないだろう．

他方，ロングの subjectivity は，彼の現在の subjectivity 構築の原則がある程度反映された結果であるかもしれない．すなわち，アメリカ人という subjectivity を積極的には構築しないというロングの subjectivity 構築の原則があったため，他者からアメリカ人として判断されうるような行動を避けていた可能性がある，ということである．次の会話例も見てみたい．

会話例 5

1	ダイゴ		ん↑これパンプキン,かどうかちっと分からない
2	ロング		あ，こっちですねパンプキン
3	ダイゴ		これ↑シナモン入ってるやつ↑
4	シンヤ		ん，(オール) - パンプキンエールですねこれ
5	エミ		え::どうなんだろう
6	ロング	→	いや，うまいですよ海外でも結構人気でいろんなのあるらしいですし
7	エミ		う::ん
8	シンヤ		ほんとにうまいですよ h
9	エミ		まあ，せっかくだしね::hh

この例も会話例 2 と同様，ロングが友人とビアフェスティバルに行ったときに録音された会話である．この例の直前では，参加者がみんなで様々な種類のビールを飲み比べており，ダイゴがエミにパンプキン味のビールをすすめようとしていた．1 行目から 4 行目にかけてはどれがパンプキン味のビールなのかをダイゴが探している．4 行目でそれは見つかったが，5 行目でエミは「どうなんだろう」と，パンプキン味のビールという一般的にはあまり知られていないものを飲むことにためらいを見せている．すると 6 行目でロングは「うまいですよ」とその味の主観的な評価を述べ，さらに「海外でも人気があり，種類も多い」という情報を加えることによって,そのビールが飲むに値するものであることを，ダイゴと共同してエミにすすめを行っている．

ここで言われているパンプキン味のビール，もしくはパンプキンエールは，アメリカではポピュラーであり，特にハロウィンの時期になると非常によく目にするものである．そのため，ロングが「海外」という言葉で指している場所は，特定できないものの，アメリカを指している可能性は高い．一方で，ロングは「人気でいろんなのがあるらしい」と伝聞・推定の表現を用いている．すなわち，ロングにとってこれはあくまでも聞いた話で，不確定な情報であることを述べているわけである．アメリカ人が，アメリカの言語や文化に対しての知識を持っている(と期待されている)とすれば，言語や文化に関する知識からアメリカ人であると判断される可能性は当然ある．元来，相手になにかをすすめるためには,不確定な情報よりも確定的な情報を与えたほうが,確実性が高いことは明らかだろう．そうであるにも関わらず，このような形で発話されているということは，ロングがアメリカでポピュラーなビールの情報をより確定的な形で提供すること，そしてそこからアメリカ人というsubjectivityが構築されることを回避している,と考えることができるのである．

またスミスに関しても，彼の現在の subjectivity 構築の原則がある程度反映されていると言えるだろう．すなわち，スミス自身からアメリカ人というような(会話例 3 におけるハワイ人)subjectivity の構築はされていなかった．また，スミスの英語能力の高さは普段から交流しているであろうフルタにも認知されていた．これは，英語能力の高い者として普段から習慣的に相互行為を行ってきたことの現れでもあるだろう．これらの点に関してはこれからも事例を増やして検討する必要があるが，本稿で分析された結果が妥当であれば，identity や subjectivity 構築の原則は実際に構築される subjectivity と深く関係していることが分かる．すなわち，identity や subjectivity 構築の原則から，構築された，あるいは回避された subjectivity に対して正確な意味づけをすることが可能となるのである．

7. まとめと今後の課題

ここまで見てきたように，文化的アイデンティティには，インタビューでの語りから分析されるような identity だけではなく，そこでは語られないものの，相互行為を通して構築される subjectivity も存在する．これらの subjectivity は当人たちの subjectivity 構築の原則に従って構築が試みられるが，必ずしもその通りに構築されるわけではない．どのような subjectivity が構築されるかは，ここまでの会話例の分析で見てきたように，その場面の文脈やほかの参加者との関係性によっても決定されるため，時には当人が望まないような subjectivity が構築されることもある．

スミスの二つの例において,ほかの参加者からsubjectivityの表示がなされていたことは,subjectivity が相互行為的に構築されることの証拠となり得る．また，本稿で分析された二人のインタビューにおいては，彼らが経験してきた様々な場面において，相手から，自分の identity と異なるような subjectivity が表示されていた経験が語られていた．そして，本稿ではまさにこれらの subjectivity に対して彼らがどのように考え，そしてどのように彼らの identity が変化していったのかを通時的に見てきた．彼らは，相互行為を通して繰り返し構築される subjectivity と自らの identity との間の乖離に葛藤を抱え，自らの identity を様々に変化させて現在に至っている．すなわち本稿では，Baynham(op. cit.)が指摘しているような，subjectivity が繰り返されることによって identity が形作られる，一つの形を見てきたわけである．

ロングとスミスはいずれも否定的な subjectivity に対処する形で identity の変化が起きていたが，他にも肯定的な subjectivity な構築を繰り返すことによって identity が形成，変化する場合など様々なケースが考えられる．しかし，いずれの場合にせよ，実際の相互行為を通して示される subjectivity が繰り返されることによって identity が形作られていることに変わりはない．そうである以上は，文化的アイデンティティを研究していく際には，インタビューのデータで得られるような identity だけではなく，実際の相互行為において構築される subjectivity にも目を向ける必要があるだろう．

一方，本稿ではこのような subjectivity の構築や交渉のプロセスについてはほとんど触れることができなかった．しかし，相互行為で構築される，あるいは回避される subjectivity にどのように向き合うかには，当人の identity や subjectivity 構築の原則も関係しており，またそれが identity 形成，変化につながる以上は，このプロセスも文化的なアイデンティティ研究においては極めて重要であるだろう．

今後は，実際の相互行為においてどのように subjectivity が構築されているのかをより微細に研究し，また，identity や subjectivity 構築の原則と，subjectivity 構築のプロセスについてさらに深く検討していく必要がある．事例を増やして identity, subjectivity 構築の原則，subjectivity という統合的な視点で分析を行うことによって，その関係性はより明らかになるだろう．

参考文献

Erikson, E.H. (1950). *Childhood and Society*. New York: Norton.

Goffman, E. (1963). *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*. NJ: Prentice- Hall. (石黒毅訳(1980). スティグマの社会学: 烙印を押されたアイデンティティ．せりか書房)

池田佳子 (2007). 言語相互行為とアイデンティティ構築　―第二言語教育への応用を考える―　語と文化 Vol.8 名古屋大学大学院国際言語文化研究科 pp.201-218.

北出慶子 (2013). 相互文化グループ学習活動におけるアイデンティティ形成の学び―正課授業における相互文化学習活動の実践分析― 言語文化教育研究 11 pp .282-305.

串田秀也 (2006). 会話分析の方法と理論：談話データの「質的」分析における妥当性と信頼性 高座社会学：方法　ひつじ書房

丸井ふみ子 (2012). アイデンティティ研究の動向―異文化接触・言語との関係を中心に― 言語・地域文化研究 18　pp.193-209.

南保輔（2000). 海外帰国子女のアイデンティティ-生活経験と通文化的人間形成- 東進堂

ミラー成三（2015). 相互行為におけるアイデンティティの管理: 語られるアイデンティティ 演じられるアイデンティティの分析 村岡英裕(編) 接触場面における相互行為の蓄積と評価―接触場面の言語管理研究 vol.12 千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書 292 千葉大学人文社会科学研究科 pp.1-14.

――― (2016). 言語的相互行為におけるアイデンティティとは: subjectivity と Identity による一考察 高民定(編) 相互行為における接触場面の構築―接触場面の言語管理研究 vol.13 千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告 307 千葉大学人文社会科学研究科 pp.37-49.

村岡英裕 (2010). 接触場面における習慣化された言語管理はどのように記述されるべきか : 類型論的アプローチについて 村岡英裕(編) 接触場面の変容と言語管理－接触場面の言語管理研究 vol.8 千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書 228 千葉大学人文社会科学研究科 pp.47-59.

中島知子 (2001). バイリンガル教育の方法―12 歳までに親と教師ができること アルク

Nekvapil, J. (2003). Language biographies and the analysis of language situations: on the life of the German community in the Czech Republic. International Journal of the Sociology of Language 162 pp. 63-83.

ネウストプニー, J. V. (1989). 日本研究のパラダイム: その多様性を理解するために 世界の中の日本 vol.1 国際日本文化研究センター pp.79-96.

Neustupný, J. V. (1985). Problems in Australian- Japanese contact situations. In Pride. J. B. (Ed.), *Cross- cultural encounters: communication and miscommunication.* pp.44-84. Melbourne: River Seine.

――― (1994). Problems of English contact discourse and language planning. In Kandiah, T. and Kwan- Terry. J. (Eds.), *English and language panning: A Southeast Asian contribution*. pp.50-69. Singapore: Academic Press.

西阪仰 (1997). 相互行為分析という視点―文化と心の社会学的記述 金子書房

Nishizaka, A. (2012). Doing "being friends" in Japanese telphone convesations. In Hisashi Nasu and Frances C. Waksler (Eds.), *Interaction and Everyday Life: Phenomenological and Ethnomethodological Essays in Honor of George Psathas*. pp. 297-315. Lanham, MD: Lexinton Books.

Norton, B., & McKinney, C. (2011). An identity approach to second language acquisition. In D. Atkinson (Ed.), *Alternative approaches to second language acquisition.* pp.73-94.NewYork: Routledge.

Sacks, H. (1972). An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology. In D. Sudnow (ed.), *Studies in social interaction.* pp.31-74. NewYorkork: Free Press.

桜井厚 (2002). インタビューの社会学―ライフストーリーの聞き方 せりか書房

Schegloff, E. A., Jefferson, G. , and Sacks, H. (1977).The Preference for Self Correction in the Organization of Repair in Conversation. pp.361-382.*Language*, 53.

鈴木一代 (2008). 海外フィールドワークによる日本系国際児の文化的アイデンティティ形成 ブレーン出版

塘利枝子 (2010). 生涯発達における文化間移動―青年期までのアイデンティティ形成を中心にして―異文化間教育 第 31 号 pp.19-32.

[i] また，これまで述べてきた identity，subjectivity 構築に関わる意識と subjectivity を 4 つの階層にあてはめると，実際のディスコースで適用されるようなミクロなルールが subjectivity にあたり，もっともマクロな決定要因が identity に当てはめることができるかもしれない.

[ii] 鈴木(2008)は，文化的アイデンティティを「自分がある文化に所属しているという感覚や意識」(p.33)としており，社会的アイデンティティに含まれるものとして捉えている.本稿でもこれに従う.

[iii] Goffman はカヴァリングを「スティグマのあることを率直に認める事のできる人びとは、率直に認めはしてもなほ、そのスティグマが人の目に大きく移らないように大変努力する」としている。すなわち、一度知れてしまったスティグマを自分の他の要素によってそらすことを行っているわけである。

[iv] 括弧内は不明瞭であったが，さんという呼称表現が使用されているため，呼びかけと判断できる.

[v] Nishizaka(2012)では，電話での会話を分析し，人がいかに「友人－友人」という関係性を行為(doing being friends)しているかを分析している．それによると，友人という関係性も事前に決定されているものではなく，実際の相互行為において行為されているものであるという.